

渋沢栄一の国民外交の原型

——1879年アメリカ前大統領グラント将軍接待——

李 佩*

The Prototype of Shibusawa Eiichi's National Diplomacy: The Reception of Former President General Grant in 1879

LI PEI

By spelling out what to do when Shibusawa Eiichi receive General Grant in 1879, to close to the prototype of Shibusawa Eiichi's national diplomacy. By examining the influence of thought in youth, to characterize the archetype of Shibusawa Eiichi's national diplomacy.

キーワード：渋沢栄一、国民外交、グラント将軍、原型

Key Words: Shibusawa Eiichi, national diplomacy, General Grant, Prototype

はじめに

渋沢栄一（1840-1931）は日本近代資本主義システムの構築や教育文化慈善など、国内事業のみならず対アジア経済進出、対米国民外交など、広範囲に及ぶ多くの足跡を残してきた。渋沢の対外事業関係については、これまでに木村昌人氏、片桐庸夫氏を代表とする研究者が国民外交や民間経済外交という枠組みで整理している。それらは主に1902年以降の渋沢栄一の対米関係事業について、特に1909年以降のアメリカ排日運動に対処するために渋沢が論述したものであった。筆者が渋沢の対外事業について研究を進める過程において、未だ空白であった1902年以前の渋沢の対米認識や関係事項について着眼したところ、渋沢にとっても初めての国賓となった1879年のアメリカ前大統領グラント将軍の接待の重要性が新たに明確化した。グラントの接待は渋沢の対米認識に大きな影響を与えたのみならず、国民外交の原点となり、この接待の中で形成された国民外交の原型の特徴は、更にそれ以降の対アジア及び対米国民外交活動にもその影響を及ぼすものとなったのである。

* 中央大学政策文化総合研究所客員研究員

Visiting Research Fellow, The Institute of Policy and Cultural Studies, Chuo University

「国民外交」は近代においてよく使われる用語である。信夫淳平の解釈によれば、それは使われる状況によって意味内容が変化するほんやりして曖昧なものであった¹⁾。「其の一は、国民の時代思潮を酌み、国民の対外的自覚を代表して政府の行う所の外交、即ち *Diplomatie nationale* で、其の二は、国民が政府の形式外交と離れ、相手国の国民との間に互に誠意を披瀝して意見を交換し、意思の疎通を計り、将た特定の行為に由りて友情を表彰し、依つて以て、国交の親善に寄与するといふ謂ゆる *People's diplomacy* である」²⁾。つまり、「国民外交」には現在用いられている民間外交³⁾に近い第二の意味の他に、国民が対外問題に高い見識を持ち、国家の存立と向上のために合理的自覚によって取り組む意味があるとされる⁴⁾。筆者は、渋沢の国民外交の重要な特徴の一つはまさに上述の第一の意味にあると考える。これまでの渋沢研究では、木村昌人が、当時渋沢が展開した「国民外交」を「民間経済外交」として読み、それを「非正式折衝者が、国家間の経済問題に関する話し合いや交渉・親善を兼ねて行う外交」と定義し、渋沢を民間経済外交の創始者であると評価した⁵⁾。しかし、渋沢の対外活動は政府と緊密な関連性を持っている他、その対外活動内容には経済の範囲を超えたものが多く存在していることから考えると、民間経済外交の枠組みのみでは説明できない部分があると考えられる。また片桐庸夫は渋沢が自らの対外交渉活動を「国民外交」と呼んだことに着目し、渋沢の取り組んだ国民外交における行動様式の特徴を次のように的確にまとめた。「実業家を核とし、必要に応じて知識人、学者、そして宗教人などの参画を得て、政界、官界と協力する。或いはその政財官との間に築いた人的資源やネットワークを駆使することによって、政府・外務省、即ち国の展開する外交を支援してその補助的役割を果たし、更にはそれらを通じて国の外交政策の中に自らの考えや実業界の主張を反映させることを目指した点にある」⁶⁾

渋沢の国民外交についての管見であるが、国民外交の原点を探り、その特徴と思想的根源を解明することは彼の国民外交の全体像釈明の一助となる他、問題の本質探究を可能とするのである。渋沢の対外活動は国益に直結するものが多く、また政府との関係も緊密であるから、「民間外交」よりむしろ「国民外交」という表現が相応しい。以上の理由から本論文では、「国民外交」として統一することとする。

本論文はこれまでの研究で見過ごされてきた1879年のグラント将軍接待における渋沢栄一の言動を明らかにしながら渋沢の国民外交の原点に迫り、更に渋沢が青年時代に受けた思想的影響を考察し、その国民外交の原型の特徴を総括することを試みる。また、これまでの渋沢研究は、渋沢を偉人として事績を後から追認するものが多かったが、本論文では渋沢を一人の成長する人間として取り上げ、当時の歴史現場に可能な限り接近し、1870年代の渋沢の考えと行動を明らかにした上で、1879年のグラント接待を解明することを試みることとする。

1. 渋沢栄一の生い立ちと1870年代の対外活動

渋沢は「それまで並立していた西洋的国際社会とアジア的秩序が接触して、前者がその優位を後者に押し付けた」⁷⁾時代、アヘン戦争が勃発した1840年に豊かな農民の家に生まれた。幼い頃より父と従兄の尾高淳忠から四書五経などの儒学の経典を学び、尾高淳忠から後期水戸学の影響を強く受けた他、数回にわたる江戸遊学と志士らとの交友が加わり「尊王攘夷」の思想を形成し、1863年には同志と外国人居留地焼き討ち計画を立てている。後年渋沢はこの頃の排外意識について「余は、欧米諸国はすべて他国を侵略するを事とする国なりと思えり。かの英国が支那に対して、アヘン戦争をなし、支那の領土を占領せしがごとき、強く吾人の排外的思想を鼓舞した」⁸⁾と回顧している。この頃の渋沢はアメリカも「夷狄」の一つとして捉えていた。1864年渋沢は一橋家に仕官したが、その財務・経営能力と順応性が高く評価され、一橋慶喜が第15代将軍になった翌年の1867年1月、将軍の弟徳川昭武を正使とする幕府のパリ使節団の随員に抜擢された。欧州滞在中、日本と欧州列強の産業・軍備の圧倒的な差に驚いた渋沢は、使節団業務の傍ら、欧州の近代工業社会や資本主義経済活動を積極的に見聞し、「文物ノ富、器械之精」⁹⁾に傾倒し、また欧州には日本のような「官尊民卑」の弊害がないことに深い感銘を受けた。1868年11月、欧州から帰国した渋沢は明治の新時代に直面する。慶喜の下で静岡の勤務を経て、1869年末には大隈重信の説得を受けて大蔵省に入り、大蔵大輔、井上馨の片腕として財政・金融制度の確立に尽力した。

「明治維新の一連の変革は、一言で述べれば、列強の支配する国際社会に独立国として伍していくことのできる政治権力と経済構造をつくり出すための必死の試みであった」¹⁰⁾。政治的には幕府と各国の結んだ条約には関税自主権がなかったため、領事裁判権という屈辱的な対外通商条約を改正し、自立した独立国家として国際社会と付き合うことが迫られていた。経済的側面から見ると、1830年代には産業革命を完了していたイギリスをはじめ、欧米各国では既に資本主義経済が確立していたことに鑑みるならば、明治維新当時、欧米諸国へのキャッチアップのための環境整備が何よりの急務であった。政府は一連の殖産興業政策を実施し、欧米諸国の産業革命の成果を導入するための条件を早急に整えようとした。このような時代の流れに身を投じた渋沢は1873年に辞官し、1867年欧州外遊で得た経済システム構築の知識や情報をいかしながら、会社を始めとする西洋諸国の様々な新しい概念や設備、制度を文脈の異なる日本に移植していく過程に大きな役割を果たした¹¹⁾。青年期から後期水戸学の影響を強く受けてきた渋沢は自身を国の臣として自負し、君主の統治と人々の生活の安定義務を代行し、民間経済を発展させることを自身の義務と

して認識した。1873年に渋沢は第一国立銀行頭取に就任し、「冀ハ此銀行ノ株主及其实務ニ従事スル者ハ……私ヲ去リ、公ニ就キ、協立ノ意念ヲ扩充シ……能ク各自ノ実利ヲ興シテ併テ全国人民ヲ裨益シ、以テ富国理財ノ一助タランコト翹足シテ待ツヘキナリ」¹²⁾と国益志向を前面に押し出しながら、政府の定める優先発展分野である銀行業の確立に自らがバンカーとして大きく寄与した。第一国立銀行の開業時、「その時分靴は誰もはきません、洋服も子爵（渋沢を指す一引用者）位のものでした」¹³⁾であった。1877年西南戦争の期間中、渋沢は第一国立銀行の株主総会において本銀行の利益を犠牲にしても政府に協力し金融問題を解決すると宣言し、1879年には全国の産業興進を援助するために国益増進に裨補する企業への融資においては利息を減らしても応援すると表明した¹⁴⁾。また、銀行業の組織化を目指して1877年に「択善会」を立ち上げ、同業者間の利益調整、情報交換及び欧米銀行業務の学習などの機能を持たせた。渋沢は民間経済の近代化を自身の使命とし、経済界を啓蒙しようとした。1867年の欧州外遊で近代資本主義経済を本質的に把握した渋沢は、金融業と合本主義の両輪による会社設立が不可欠であることを認識し、1870年代からの殖産興業による近代産業の創設にも投資者・経営者として積極的にかかわり、1873年に「抄紙会社」を設立、1879年から大阪紡績株式会社の設立準備をスタートした¹⁵⁾。

明治政府は1874年5月、台湾に漂着した琉球人が現地人に殺害された事件の問責を口実に台湾へ出兵した。また明治政府の軍艦雲揚号が朝鮮を挑発して行った1875年の江華島事件以降には対外拡張路線が確立している。1870年代は明治政府が清国に軍人を派遣しスパイ活動を展開した時期であり、対清強硬論を唱え始めた時期でもあった。台湾出兵の年、三菱の岩崎弥太郎が政府の軍事運輸を、大倉喜八郎は軍隊輜重の任を引き受け、危険の中で政府の期待に応え、大きな利益を得た他、政府からの信頼を大いに高めたが、渋沢は第一国銀行の大株主小野組の倒産で事態収束に忙殺していた。

渋沢は大蔵省在官時代から財政の合理性から当初の政府内における台湾出兵論に反対したが、アジアへの経済進出には積極的であった。1874年渋沢は第一国立銀行の海外発展を計画し、政府の要請に答えて第一国立銀行職員を上海に派遣し、現地貨幣について調査した。また、1877年時には大蔵卿大隈重信の依頼を受け、清国政府からの1000万円借款の要請があり、この交渉のため三井物産社長の益田孝と共に上海に赴いた。そして、1878年には第一国立銀行が釜山支店を設立し、三井物産上海支店が第一国立銀行の代理店を設立している。

これらの対アジア経済進出の他、渋沢が関わった銀行や会社の技術学習や外国人雇用関係など、1870年代には欧米との接点も多くなってきた。1874年に種田誠一、1879年に大川平三郎をアメリカに派遣し、銀行業と製紙技術を勉強させた。渋沢は欧米銀行業の発展に深い関心を払い、1878年択善会第18回集会において「欧米四国銀行協会の状況」につ

いて講演もした。1870年代のアメリカは科学技術の革新によって経済が飛躍的に発展し始めた時代であった。1876年にベルの発明した電話や、発明王のトマス・エディソンが仲間と発明した一連の製品が市場に出回ったことにより、その後の人々の生活に革命を起こした¹⁶⁾。1879年にプロクター・アンド・ギャンブル社（P&G）は偶然に浮かぶ石鹸の製法を発見してそれを売り出し、新聞雑誌の宣伝と相乗効果で僅かの間にアメリカ人の間に広がり、中産階級の価値観である清潔感や消費生活を象徴する代表的な工業製品となった¹⁷⁾。1879年頃の日本は、コレラの予防策は石炭酸の撒布以外には皆無の時代であった。渋沢は1867年の欧州外遊を経て、攘夷思想を捨てた。1873年大蔵省辞官のきっかけとなった井上馨と連名で出した「財政改革ニ関スル奏議」のなかで、「今欧米諸国は民皆実学を務めて智識に優なり……我が民は即ちこれに反す……欧米諸国の民たる、概ね智識に優にして特立の志操を存す……今我が民即ちこれに異なり……智識開けず志操確からず¹⁸⁾」と述べ、欧米を模範として前面に押し出している。「物質上のことにはどうしても（欧米に一引用者）適わぬ¹⁹⁾」と考えた渋沢は技術や経済発展などにおいて欧米に学ぶべきことを主張したが、精神面の根幹は儒教と後期水戸学であった。

渋沢にとって1870年代は苦闘の時代であった。官金取り扱いが中止となって以降、社会一般では「銀行」に対する不信が高まり、また1879年までに開設された153の国立銀行との相互競争も激化した。このような背景の下、事業の要である第一国立銀行は立ち上げ当初から業績が不振であった。渋沢の経営時、1876年の下半期の資産は1873年設立時の半分以下に減少し、大口株主の小野組の破産も手伝って銀行廃止論まで噴出した。その後、順調に資産が増加したのは優秀な人材である佐々木勇之助が支配人になった1882年以降であった²⁰⁾。渋沢が公の場で言論活動を展開し始めたのが明治20年代（1887年以降）であったことを考えると、1870年代の渋沢は、まだ社会的に知名度が高いとはいえなかった。しかし、1867年からの欧州外遊を通じて広い世界的視野を得て、また三年余りの大蔵省勤務では、全国の租税と金融、貨幣制度改革など、一連の仕事経験から全局を見渡す視点を持つようになった。これらの新たな視点から、政府上層部と共に国の発展方向を考え、議論するチャンスを得て、また銀行業者の組織である「択善会」ではリーダーとして金融界の結成を試みている。これらの貴重な経験が重なって、渋沢には他の経済的有力者と異なる明確な特徴が形成された。それは即ち一個人や一企業の利益を越え、国全体の経済と発展方向を考えながら行動をとることであり、財界リーダーとしての重要な素質でもあった。明治初期には、三菱、三井のように政府の資金調達や戦争時の協力などに代表される国益志向の行動が多々見られたが、国の経済発展に合理的方向性を与えようとした渋沢のような存在は非常に珍しかった。

2. 明治政府の条約改正運動とグラント将軍の来日

1878年に西南の役の鎮圧に成功した明治政府は国内外にその力を示すため、国内において地方自治を進めるために新法を制定し、東京府をはじめ各府県会を発足させて、自由民権運動に対抗しながらも急ぎ足で殖産興業政策を進めた。また、対外的には不平等条約改正のための取り組みに迫られていた。明治政府の悲願ともいえる1854年の「日米和親条約」の改正は、1871年岩倉使節団の改正交渉が全て失敗し、1876年の寺島宗則外務卿による各国との改正交渉も難航していた。交渉過程で日本の国民世論の反発が強いことを強調した寺島宗則に対して、条約改正に強く反対したイギリス公使パークスは、商工業者の世論を集結してそれを実証する代表機関が無い旨を指摘して反論した²¹⁾。至急に商工業者の機関設立の必要性を感じた大隈重信は渋沢栄一と相談し、1878年3月東京商法会議所²²⁾を設立した。初代会頭には渋沢が就任し、渋沢と親交のある福地源一郎²³⁾と益田孝が副会頭に就任した。この東京商法会議所は「条約改正交渉のための商工業者の世論を代表する機関として政府の上から誘導された機関であることと『東京府下ノ有志紳商等ヲ喚起シテ会議ノ団体ヲ今日二組織シテ商工の公益ヲ謀ラシム可シ』²⁴⁾とする殖産興業政策遂行のための機関であり、事業者の利益機関でもある二つの意図」²⁵⁾があったと言える。

1870年代はアメリカの駐日公使の報告がワシントンに届くまで一、二ヶ月がかかった時代であり、アメリカの対日政策は駐日公使個人の性格と意見に大きく左右される傾向があった。様々な事件、紛争、そして条約交渉の難航にも拘らず、日米の相互イメージは変わることなく良好であった。「開国が定着すると共に、日本国内では、アメリカが日本を適切に導いてくれた、という感謝に満ちたアメリカ観が複数の論者によって表明されることになった。アメリカにおいても、健気に西洋文明の摂取に努める日本に対する高感度が高かった。岩倉使節団に対するアメリカ国民の歓迎ぶりは、その一例である。」²⁶⁾

1878年にワシントンの吉田清成駐米公使は米国との条約改正交渉を進め、7月に吉田・エヴァーツ協定が成立し、開港の増設や輸出税の廃止と引き換えに日本の関税自主権を承認したものであったが²⁷⁾、他の条約締結国が同様の協定に同意した時にものみ発行するという条件がついていた。「イギリスは日米交渉の先行に反発し、寺島の税権回復要求を拒絶した。ドイツ、フランスもイギリスに追随した。その結果、吉田・エヴァーツ協定は発効せず、寺島の交渉は行き詰まった。日米間に初期の友好が再確立された結果、日米とヨーロッパ諸国との調整が難しくなったのである。」²⁸⁾

設立早々の東京商法会議所が活動の重要な一環として取り上げたのは、設立の直接的契機である不平等条約改正運動の取り組みであった。この取り組みが即ち1879年9月に商工

業者の意見として外務卿井上馨・大蔵卿大隈重信に具申した海関税則に関する「建言書」を代表とする活動であり、実は1879年7月から政府動員のもとで開催された一連のアメリカ前大統領グラント将軍歓迎活動のような水面下の活動なのである。

1879年6月21日、ユリシーズ・シンプソン・グラント米国前大統領（Ulysses Simpson Grant）一行を載せた米国軍艦リッチモンド号が長崎に到着した。6月26日の出迎えの日本駐米公使吉田清成と共に長崎を出航し、7月3日午前横濱に入港すると日本側の「接待員は其艦に抵りて之を迎へ、将軍は夫人令息其他の一行と共に祝砲烟花の轟声中に艦を棄て、上陸し、直に鎮守府に入る、此處には岩倉右大臣、伊藤、西郷、井上の諸参議等出て迎へ」²⁹⁾ た。

グラントは1861年からの南北戦争で、北軍総司令官として北部の勝利を導いた。戦後は1869年から1877年にかけて二期にわたって大統領を務めたが、政権は行政各省の絶え間ない汚職事件に見舞われ政界を去った。しかしその後も世間からの非難が続き、非難と煩わしさに安心できる場所をなくした³⁰⁾。そもそも、政治的に無難で、尚且つ一定の注目を集める立場を確保する手段として構想された海外渡航であったが、何ら公職もないグラント個人の私事としての世界旅行は、彼の南北戦争での名声の大きさ故に、旅行く先々で各国政府に優遇され、程度の差はあったものの公的な性格を帯びるようになった³¹⁾。グラントはイギリスのヴィクトリア女王、鉄血宰相として名高いドイツ帝国首相ビスマルク、タイの国王ラーマ5世とも面会した。中国において李鴻章、恭親王と数回も会見し、琉球問題における日中争議について会談した他、李鴻章から中国側の公文書を日本政府に渡すことも頼まれた。

3. 日本の歓迎ぶりと政府の思惑

グラント世界旅行の最終目的地は日本であった。早くも1879年1月17日にはグラントが「有名ノ大統領ニ有之且先年岩倉大使同国へ派出ノ節『グラント』氏在职中ニテ大使ヲ懇待致サレ候廉ハ可報酬筋ニモ有之」であるため、「各国皇族ヲ御饗待被為在候振合ニ照準シ御手厚ニ御接遇相成」³²⁾ という接待方針が決められていた。「百事注意歓晤ヲ盡シ候事行届兼候義」³³⁾ というこで、1月20日具体的な接待事務体制確立に向けて準備作業が展開された。国家の接待予算では、同年来日のドイツ皇孫とイタリア皇族の接待費は前の照準例より「精々節儉し」、それぞれ2万5000円（一年間滞在の接待費）と1万円までに削られたが、グラントの場合は上述の1月24日付けの方針によって、わずか一ヶ月の滞在予定の接待予算が1万5000円に決められた³⁴⁾。更に2月8日、寺島外務卿は「見込ヨリハ實際頗ル御手厚ノ御仕向ニ相成随テ諸入費モ相嵩ミ」、これに加えてグラントの日本滞在が二

ヵ月まで延長したことを理由に、「三客接待費交互流用」の方針でドイツ皇孫とイタリア皇族の接待費を削ってグラントの接待費に充てた他、更に 2,000 円余りを追加して、グラントの接待費予算は最終的に約 2 万 2000 円となった³⁵⁾。日本政府のグラント来日重視は並大抵のものではなかった。

7 月 3 日「東京鎮台第一聯隊第一・二大隊を乃木中佐（希典）が引卒して、……停車場には警部巡査数十人警衛の為出張³⁶⁾」という嚴重な警備の中、グラントは横浜から東京に到着し、翌日 4 日に明治天皇に謁見するという榮譽を得た。米國獨立記念日の 7 月 4 日に天皇との謁見をアレンジした日本政府は、グラントに相当気を遣っていた。7 日、天皇はグラントと共に日比谷練兵場で陸軍飾帶式を觀て、正午は親王、大臣、參議、各國公使の陪席のもと、芝離宮において盛大な歡迎の宴會が開かれた。「此日グラント君も深く聖上御待遇の厚さを感じ思はれ、歐亜諸國を經歷せしうちにも佳麗鄭重を極めたる待遇にあひしは幾ばくなることを知らぬも、まだ日本臣民の如く懇切の待遇を見ずと語られ³⁷⁾」た。このように、日本滞在中のグラントは數回にわたって天皇に謁見した他、政府の最上層部や華族、民間の著名人物及び各國の外交官などとも交流を行った。また東京と横浜を數回行き來し、明治維新以降外國人の避暑地として愛された日光や箱根、豆州（現在の静岡県）三島などにも旅行している。

政府の綿密な準備と同時進行で、民間の各界も大いに動員された。新聞各社、特に政府系の『東京日日新聞』は 1879 年 1 月にグラント来日を報道して以降、一行の歡迎や接待のための準備や協議の様子、來日後のグラントの言動を詳細にわたって掲載していた。またグラント訪日の前後には、一般向けに彼の経歴と人柄を紹介する『格蘭氏伝倭文賞』という絵双紙のような讀物が出版され、「來賓を文明の使者や文武両道の英雄として表象し」、「その半生が成功譚として構成され」、「いわば『殖産興業・富国強兵』を担うべき國民の模範として³⁸⁾」描かれた。この一件は早い段階から經濟界を巻き込み、当時東京商法會議所會頭であった渋沢は、早くも 1879 年 1 月には民間によるグラント歡迎イベントの経費調達を始めた³⁹⁾。民間有力者は大々的な歡迎イベントを開催し、社会的にグラント歡迎ムードを作り上げ、上野を通行する際には「揃ひの袈裟に揃ひの提灯で日本橋際に整列して大提灯と国旗の上げ下し⁴⁰⁾」という空前の風景を演出した。

日本防衛省防衛研究所の陸軍大日記と海軍省記録のうち、グラント接待關係の資料は 170 巻にも及んだ。1870 年代を通してグラントの接待は明治政府が最も重視した外賓の接待であった。しかし、これらの空前の接待は、実は明確な外交目的を持つものであった。第一に、先に述べたように 1878 年寺島宗則外務卿は米國との交渉で関稅自主權回復に成功したが、英國などの反対に遭い実施困難となった。グラントの横浜到着より二日前の 1879 年 7 月 1 日に日本政府は米國との改定條約を發表した⁴¹⁾。「日本に深厚なる同情を有し、最も

早く我条約改正の趣意を賛同したるグラント將軍」の来日にあたり、「新条約を發表するは決して無意味にあらざる」⁴²⁾ ことであつた。日本政府はグラント来日を契機に、日本の「文明」的な姿をアピールすることによって、米国との更なる条約改正及び改正条約実施のための国際世論の形成に寄与することを期待していた。第二に、1879年4月4日に日本政府は「琉球藩ヲ廢シ沖繩県ヲ被置候」と布告し、5月10日清国總理衙門は琉球が「自為一国」であり、日本のこのような行為が中国蔑視だと主張し抗議した以降、日中間の琉球問題に関する交渉が益々激しくなつた⁴³⁾。グラントは日中兩國は共に信頼する国際的な友人であるとして、事実上の調停役を担当していた。そこで、日本政府はグラントの日本に対する好感を獲得し、日中間の外交交渉を日本に有利な方向へ導くことを目指し、大々的な「グラントへの働きかけ」を行ったわけである。かくして出迎えや、一行の往来を見ようという人々の歓迎運動がひとしきり続いた後、7月22日、「將軍グラントは伊藤公及び元老院議員の多数に伴はれて日光に往つた。其地で日支間の係争事項が慎重に議せられ」た⁴⁴⁾。また8月10日、浜離宮で明治天皇との会見において、グラントは「此琉球事件及其他トモ清国ト談判ヲ遂サセラルルニ当テハ、成ヘク外国ヲシテ之ニ干渉セシメラル可ラス……夫レ日本ト清国トハ元来同一人種ニシテ、特ニ旧好ノ国ナレハ、互いニソノ友情ヲ思ヒ、雙方相讓ル所アラハ、敦レニモ面目ヲ汚ササル様ノ示談ニ和議ヲ整ヘ、以テ兩國間の親和長久ヲ計ルヲ得可シ」⁴⁵⁾と進言し、西洋勢力の進出に対する東亜兩國の互讓提携の要を説いたグラントの斡旋は後日の日清兩國の会商に導いた⁴⁶⁾。

このような政府の思惑は当然、渋沢も知っていたはずであろう。渋沢と兄弟のように親密な関係にある井上馨は琉球問題に大きくかかわり、大蔵大輔在任中の関係建議が琉球藩属確立を促したこともあつた。グラント日本滞在期間中、井上はほぼ全ての接待日程に参議兼工部卿として参与してきた。渋沢の回顧によれば、「グラント將軍の来遊を、我々民間に於て歓迎したことに就ても、井上さんは大いに後援して呉れた」⁴⁷⁾。また、本件について大蔵省在官時代から懇親にしていた伊藤博文や大隈重信とも協議した。当時の日本の新聞は日清間の琉球問題について繰り返して報道し、渋沢・福地主導の民間によるグラント接待を反対した『郵便報知新聞』はグラント接待の目的は懇親ではなく秘密の外交問題にあることを度々指摘している。また、1879年グラントが日本滞在中に提出した琉球問題の解決案は、英字新聞の『タイムズ』や『ニューヨーク・ヘラルド』も報道している。渋沢は当時「政府に使われる」民間人で、全ての外交交渉に参加していなかつた。また、渋沢の後年の回顧では、「グラント訪日中は政治や外交問題にふれなかつた」とされていたが、井上の外交主張、渋沢と井上の関係及び当時の新聞報道などから推測し、政府と太いパイプを持っている渋沢栄一が当時、グラント接待の背後にあつた日本政府の思惑を知つても何ら不思議はないであろう。グラント帰国直後の9月10日に外務卿に就任した井上馨

は、その翌月琉球問題に関して清国政府に対する反駁答弁の覚書を宍戸璣駐清公使に送達した⁴⁸⁾。

4. 東京商法会議所会頭としての渋沢栄一の役割

「アメリカ合衆国前大統領グラント將軍夫妻來朝シ、栄一、福地源一郎、益田孝等当會議所会員中心トナリテ同將軍ヲ歡迎ヲ斡旋セシ」、1879年8月25日に「東京府民総代トシテ上野公園ニ明治天皇ノ臨幸ヲ仰ギ同將軍夫妻ヲ招請」した⁴⁹⁾。当日上野の「広小路一面から山へかけ行幸の道を除いて立錐の隙もない程の人出」⁵⁰⁾であり、養老の典及び槍劍術、流鏑馬射手、犬追物などの演武や陸軍軍楽隊の演奏が行われ、夜は花火が打ち上げられ、「公園の内外に設けたる接待所には人々充滿し、園中には御臨幸を拝し奉り技芸を觀んと集まり來るもの、埒の外に押あひへし合ひて、幾万人という数を知らず」⁵¹⁾という盛況で、二ヵ月間にわたるグラント歓迎活動は、ここに至ってクライマックスに達したのである。東京商法会議所会頭としての渋沢が、並々ならぬ情熱で經濟界を率いてこの接待に当たったことが功を奏したと言えよう。数万人が参加したこのイベントの準備のため、東京接待委員会の各委員に裝飾、建築、會計、食事、花火、槍・劍、案内記録などの明確な任務が与えられ、渋沢と福地源一郎が総括を担当した。

「府知事は府會議員・区會議長並に商法會議所議員一同を東京府庁に集会され」⁵²⁾ グラント接待について具体的に協議をしたことが示唆するように、東京商法會議所会頭としての渋沢などによる民間歓迎活動は、地方政府である東京府のグラント接待活動に組み込まれる形で展開された。これは東京商法會議所にとって、また1873年以降に民間人となった渋沢にとっても、初めての国賓接待であった。渋沢は東京府會議長・商法會議所副会頭、『東京日日新聞』社長の福地源一郎と共にこの民間歓迎活動の中心人物であった。「皇族なり政府なりの歓迎以外、人民が打寄つて米國に何か記憶に留めるやうなことをしたいと云う趣旨」⁵³⁾のもとで、渋沢は一連のイベントの企画・実施に尽力した。「日本の国情が西洋諸國に劣らないと云うことを示」⁵⁴⁾し、「外國人に日本の国力を知らしめようとした」のである。本件で渋沢が果たした役割は以下の通りである。

第一に、民間主催のグラント接待費用の調達において、渋沢は商法會議所の会員を動員した他、喧嘩までして三菱家などにも寄付の要請をしている。1879年1月3日早々には、渋沢と楠本正隆の企画で、三井銀行樓上で夜会が開催された。「夜会の席上で、グラント歓迎の費用について、渋沢が岩崎弥之助と喧嘩をした。渋沢は自分で五千元出すつもりだが、弥之助の兄の弥太郎は西南戦争で大儲けをした祝ひに一万円を出させてくれと言ふと、弥之助の返事が鈍つたので、ケチな事をいはず即答なさい」ということになり、結局弥之助

は兄は別として自分は3,000円出すと言いついで打ち解けた⁵⁵⁾。渋沢の回顧によれば本件のため3万円を集めた⁵⁶⁾。1879年当時、政府の頂点にある右大臣岩倉具視の月俸は600円、東京大学教授の月俸は120円であり、庶民の場合一ヵ月5円あれば生活できる時代であった。上述のグラント接待の国家予算2万2000円をも多く上回った3万円は当時では大金であった。

第二に、グラント接待における多数活動の組織的な企画・実施に成功した。渋沢は本件のために福地源一郎と共に東京接待委員会を組織し、頻繁に接待委員会を開き、意見統合においても大きな役割を果たした。またグラントの満足を最大限に導き出すために、広範囲の関係者を動員して豊富なアイデアを出してもらった。渋沢も1867年欧州行で習得した西洋文化と礼儀の知識を最大限に生かした。その結果として、7月3日新橋駅の歓迎式典に東京府民の祝意を表すため「蓬莱橋の傍に緑門を設け、紫陽花にてUSG（即ちグラント君の姓名）の三字を作り」⁵⁷⁾、また日本近代外賓招待史に一筆を残す空前の「提灯行列」の風景を創り上げた。渋沢はその後の展開で、益々中心的な存在となった。本節冒頭で触れた上野公園における天皇臨幸のもとのグラント招待を除き、渋沢が大きく関わったグラント接待活動は以下の通りである。

1) 7月3日、新橋駅において行われた歓迎式典。渋沢は福地と共に式典にむけ各種の準備作業を指導し当日に臨んだ。

2) 7月8日に虎の門工部大学校において東京府民主権で1,500人規模のグラント歓迎夜会が開催された。渋沢は東京接待委員長としてこの洋式舞踊会を企画し、実施に尽力した。

3) 7月16日、当時東京唯一の劇場である新富座において皇族、大臣、参議などの同席で東京府民主権のグラント将軍歓迎観劇会が開催され、渋沢は東京接待委員長として職務を果たした。これは日本近代史における初の国賓を招待した観劇会であった。「脚本はグラント将軍の南北戦争勝利の勲功を当て込んで作って、河竹黙阿弥に至急に脚色させたものであり」、「筋の主人公を強いてグラント将軍に擬して作った急拵へのこごつけ沢山で、頗るあまいもの」であったが⁵⁸⁾、グラントは「この日は特に満足の景色顕はれ新富座主守田勘弥へ緋羅紗の引幕を贈られ」⁵⁹⁾た。洋式舞踊会と観劇会はいずれも渋沢が1867年の欧州行で経験したものであった。

4) 8月5日、グラントは渋沢の設立した東京王子にある製紙会社を見学した。その後渋沢は同年7月中旬に落成した飛鳥山の自邸で盛大な宴会を開催し、至れり尽くせりの歓待をした。これは渋沢にとって初めての自宅における国賓招待であり、日本近代史においても民間人邸宅における国賓招待の最初のケースであった。8月3日の接待委員会の議論において「日本の国民一同心から歓迎致す和親の意を表する為には欧米諸国の例にならひ民間一私人の家へも御請待申さればならぬ、ことに米国の御方に対しては一層それが必要で

ある」ことが発議され、「飛鳥山の渋沢の別荘は新築で室も相応に広い様子だし且委員長の家であれば、賓客も一層満足せらる」ため、渋沢邸宅における宴会が決められた⁶⁰⁾。8月3日、早く帰宅した渋沢は慌ただしく家族一同を指揮して各種の準備に当たり、グラント歓迎のために最大限の資金投入を行った。清水組の大工に馬車の御者の休憩所や馬車道を造ってもらい、大隈重信から珍花の支那蘭の盆栽を拝借し卓上に飾った。西洋家具はすべて外務省から借りて、ランチは精養軒に出張してもらい、フランス式の料理にした。また舶来品の高価なシャンパンを何本も出した。食事の後の余興として、親交のある柔術天神真揚流の家元磯又右衛門や嘉納治五郎などに来てもらい、「大広間ニテ柔術・鎗術・長刀試合有之候、半バ職人罷出角力取致シ、是ガ余程妙ニテ大笑ニテ御座候」⁶¹⁾。当日の来客が50人ほどであったが、招客用のために集まった人は客の数の3-4倍にも達した。午餐会は予想以上の成功を収めた。

第三に、グラント接待活動の実施が困難に遭遇した際、渋沢は手腕を大いに発揮し、井上馨や伊藤博文などの政府上層部とのパイプを生かし、問題解決に大いに寄与した。本節冒頭の上野公園におけるイベントに関し、東京接待委員会の中で最初から天皇臨幸の議があった。7月7日渋沢は福地源一郎と共に東京府民総代名義で「東京府民一同の請願」として東京府知事の楠本正隆及び三条太政大臣と岩倉具体大臣宛てに天皇臨幸を乞う請願書を出した。東京府民が天顔を拝して歓喜を尽くすことが強調され、グラント招待については触れなかった⁶²⁾が、福地には「外国の賓客が日本にいる間に天皇の臨幸が実現すれば、市民が天皇に臨幸を請願・実現できるという『自由ノ精神』を彼我に見せることができ、『君主压制国』を脱していることをアピールできるという狙い」⁶³⁾が明らかであった。7月22日の東京府会において楠本から「至尊を敬い奉るの美意に出てけっして不相当の願ならねば勅許もあらせらるべきやの御内意のあり」と回答されたことが通達されたことを受けて、当日の協議で天皇臨幸委員会が発足され、渋沢と福地は委員長に選ばれた。更に請願書を公にすることも決められ、請願書認め の件と招請すべき人の名簿などについても協議し、東京商法会議所を天皇臨幸委員会の事務所として決められた。このように着々と準備を進める中、7月中旬以降になると6月から西日本で蔓延していたコレラが東日本でも蔓延した。この推計で10万5786人の死者が出た明治期最大のコレラの流行について、新聞は連日のように各地の騒然としたありさまを報じていた⁶⁴⁾。そして政府のとった検疫、患者の隔離と避病院の設置、家屋の消毒など、一連の近代的対策に対抗した民衆の「コレラ騒動」が各地で起こった⁶⁵⁾。グラント来日と共に文明国としての体裁を全うするために強化された政府のコレラ対策に対し民衆の反発が益々激しくなり、「同病院に罹る者は一々病院へ入れ、治療と名を附け其実は右の患者を殺害して肝を取り、米客グラント氏へ高価に売渡すの内約ある」⁶⁶⁾という噂は伊藤博文の耳にもはいった。

右大臣岩倉具視は天皇臨幸に難色を示した。それに、最初から渋沢・福地の主導したグラント接待活動に反対し、しきりに本件について『東京日日新聞』と論争を展開してきた『郵便報知新聞』は社説を発表し、渋沢・福地両氏には東京府民総代の資格がないこと、渋沢と福地の天皇臨幸請願の思惑は外交密事にあり、天皇臨幸はグラント接待と別にして涼しくなる秋にするべきだと主張した⁶⁷⁾。井上馨から岩倉の内意を知った渋沢は8月1日に福地と連名で岩倉宛に書簡を出し、本件を猶予すれば「折角是迄政府・人民ヨリシテ同氏へ表シ候懇篤之誼モ此一挙之為二或ハ画餅ニ属候様二相成候ハ必然之勢ナリ、深々恐懼罷在候」、「時機ヲ遷延ニ失候テハ府民ヘ対シ私共之信ヲ欠候而已ナラズ、或台下之御面目ニモ相関候」⁶⁸⁾と天皇臨幸を促そうとした。にもかかわらず、8月3日楠本知事は臨幸委員会に準備作業の不備とコレラの流行を考えて天皇臨幸は盛暑をさけるべきだと伝えた。これを受け、臨幸委員会では一時に臨幸を秋にずらすこと、「上野公園は御臨幸までは府民の用意中なれば、其の用意はたとひ目今不用たりとも之をグラント接待の為には流用せざるべし」⁶⁹⁾ということすら決められた。それでも渋沢はあきらめず、親交のある楠本府知事に大いに働きかけた。「折角府民は御臨幸を願ふ事になって喜んでゐる際、突然御取り止めとなつては、我々間に立つて斡旋してゐる者の面目が立たぬ」⁷⁰⁾という渋沢の悲しみに打たれた楠本知事は、政府上層部の説得のために奔走した。渋沢たちの懸命な努力が報いられ、8月23日宮内省はようやく天皇臨幸の許可を通達した。天皇臨幸にこだわった渋沢には「新開国の日本はもはや、天皇を現つ神として遥拝し奉つるのみであった往昔の状態ではなく、上陛下は万民を赤子としていつくしみ給ひ、下万民は陛下を慈父として敬愛し奉るだけに進歩して居る」「有様を世界的的識者に了知して貰いたい」⁷¹⁾という意識があったと言えよう。これもグラント向けの文明化をアピールする様々な演出の一環であった。

以上の一連の歓迎活動の中、渋沢栄一にとって歴史的意味のある一場面があった。7月8日虎の門工部大学校におけるグラント歓迎夜会には皇族、大臣、参議、勅任官、諸省の局長、陸海軍の大佐、五等以上の司法官、東京府知事と各区郡長、東京府会と商法会議所の議員、各国の公使と領事、内外の新聞記者、紳士、学生、豪商、僧侶、医者など1,500人の来場を得た。「場内の一方は来賓席で各国の公使、日本の大官達とそれらの夫人方」であり、「片方は接待委員。同家族及び実業家即ち主催者側の人々の席」⁷²⁾であった。万事整ってから開会式において、「グラント君には、委員の出迎えと共に夫人を伴ひて来会せらる、玄関にて馬車を下らるゝを見て渋沢栄一君はグラント君の手を執りて」、席の中央を通過して「講堂正面の椅子に導」いた⁷³⁾。つまり、この夜、渋沢は公の場で堂々と日本の大官や各国の公使と対等の席に着いたのみならず、主催者として国賓である米国前大統領の手を取って席に導くという大きな名誉を得た。これは民間経済界のリーダーとしての東京商法会議所会頭渋沢の公式の登場であり、日本近代における民間経済界リーダーの外交舞台

への初登場でもあった。1873年退官後、民間経済の発展と「官尊民卑」の打破を志した渋沢にとって、これは待望の歴史的一場面であった。

5. グラント接待の成果と影響

1879年のグラント接待は「グラント工作」を目指した日本政府にとって、また政府の「グラント工作」の大きな補完として民間接待活動の中心に立った渋沢栄一にとっても、得た成果は大きいものであった。

(1) 日本政府の成果

第一の成果は、アメリカ前大統領グラントの対日好感を獲得することに成功した。このように良好な対日感情が様々な形式で「日本社会の進歩と文明」として国際社会向けに発信されることによって、日本の国際イメージアップに寄与したと言えよう。日本滞在中、最新の軍事、行政、産業、司法、教育、公共施設に案内されたグラントは書簡にて友人や家族に日本の目覚ましい進歩の様子を伝えた。なかでも近代的教育制度の定着に向けた日本の努力に惜しめない賞賛を与え、日本の進歩を物語る象徴として取り分け高く評価した⁷⁴⁾。民間による接待活動の中でも、渋沢と福地が企画・実施した7月8日の洋式大型舞踊会はグラントにとっても特に印象深かったようである。西洋上流社会スタイルの服装を身に纏う日本人の有司貴顕の姿を目にしたグラントは、日本が欧米の風習を自己の文化として取り入れることを文明と進歩の定着に向けての努力として評価し、「日本人がすでにアジアの中の一番優れている人民」⁷⁵⁾だと称賛した。グラントはインドの人々を自らの手で秩序を保てない野蛮人として見なし、中国人の勤勉と鋭敏を評価し中国人の可能性を見込んでいたが、非能率で時代遅れの清朝政治は外部からの脅威に太刀打ちできないと厳しい視線で見ている⁷⁶⁾。このように、アジアの中でグラントが一番評価しているのは日本であった。またグラント訪日中、書記として随行したジョン・ラッセル・ヤング(John Russell Young)は『ニューヨーク・ヘラルド』新聞の編集員や海外特派員を務めるジャーナリストとして知られている人物であった。ヤングは日本に浸透していく欧米の精神や制度を前にして、日本固有の風景が失われていく現状認識をしていたが、欧米の技術や制度の導入に努めた日本人の努力を肯定し、賛辞も送った⁷⁷⁾。日本滞在中、ヤングはグラントの言動、諸人物との交流の詳細を定期的に同新聞で発表した。これらの記事が人気を博したため、ヤングは帰国早々『Around the World with General Grant』(全2巻)というグラント旅行記も出版した。また上述の一連の民間によるグラント接待活動には多くの各国公使や在日外国人が招待され、グラント同様に多数の日本文明に目を見張っていた。このように、グラ

ントの良好な対日感情が様々な方法で表現され、それが人々に発信されることによって、日本の国際的イメージアップとつながり、諸外国との条約改正のための国際世論の形成に寄与することができたと言える。

第二に、グラント接待は日本政府の目指した清国との間の琉球問題解決の達成の一助となった。「恭親王李鴻章兩人の意底は十分グラントより聞取申候決て容易に戦端を開く等の事は有之間敷終には雙方より熟談の時機も可相生候」⁷⁸⁾ということが物語っているように、日本政府はその対日好感を利用し、グラントから清国恭親王と李鴻章の真意を聞き出した他、グラントに「琉球は日本の領地にして其人民は日本人なり」という日本の主張に同調させた⁷⁹⁾。結果として日本政府はグラントの「分島方案」よりも自身に有利な方案で本問題の解決に一段落をつけた⁸⁰⁾。これまでの近代日中交渉史研究では、琉球問題におけるグラントの調停は言及されてきたが、日本政府によるグラント接待が琉球問題の交渉に与えた影響についてはほぼ言及されていなかった。

第三に、日本の伝統文化に興味を示したグラントは明治政府に伝統文化を保護する意思を持つように促した。倉田喜弘⁸¹⁾氏の研究によれば、能楽はグラントの関心を引き付けたことによって、芸能を「娯楽」や「風俗」と見なして「遊芸」だとする明治政府の芸能に対する価値観が一変し、能楽に初めて文化という視点が芽生え、これによって、文明開化の時流を乗り越えることができたのである。19世紀後半、西洋の衝撃を受け欧化主義が台頭する中で、来日した「西洋の人々はしばしば『オリエントの人間のもつ人間的現実、ひいては社会的な現実』を度外視して、恣意的にオリエントなるものを西洋文明から遅れたエキゾチックなものとして捉える傾向にある」⁸²⁾というオリエンタリズムの影響で日本を見ていた。グラントも例外ではなかったが、日本への好感から、これら在来の伝統文化に対しても好意的に興味を示した。8月5日渋沢の飛鳥山別荘におけるグラント招待午餐会において、明治初期の政治家の感覚からすれば旧弊であった演武が行われたのは、恐らくグラントが能楽や新富座の劇に興味を示したことから、この他の日本伝統芸能をもってグラントに喜んでもらうことを発案し、グラントは尚武を尊ぶ元軍人だから武術に興味があるはずだという判断に至ったのであろう。渋沢の娘である穂積歌子の回顧によれば、グラントは演武が大層気に入った⁸³⁾という。グラントのためにアレンジされた8月25日の上野公園における天覧演武の直後、日本新聞では武術の価値を見直すことが主張された⁸⁴⁾。

(2) 渋沢にとっての成果と影響

日本政府が上述の成果を得るために、一民間人として最大限に貢献したのが渋沢である。官尊民卑の社会における政府の動員という意味において、グラント接待は渋沢にとっても必須の業務であったが、それと同時に、国益志向や東京商法会議所会頭としての使命感か

ら渋沢自らが進んで臨んだ仕事でもあった。バターについての知識もなく、外国の礼儀作法も分からない日本社会において、渋沢は 1867 年欧州行の経験を生かしながら、大胆に西洋文化を融合させたアイデアを出し、到着歓迎式典における府民代表の歓迎文の読み上げ、洋式舞踊会、個人邸宅における午餐会、提灯行列の歓迎など日本近代において初めての国賓招待のモデルを創った。グラント接待における功績により、明治政府は渋沢に賞を授けている。また、国賓や外交官の接待や外国との社交場として明治政府によって建てられた鹿鳴館が落成したのは、グラント来日より四年後の 1883 年であった。

グラント接待が渋沢に与えた影響は、第一にこの接待を通して東京商法会議所及びその会頭を務めた渋沢自身の社会的知名度が大いにアップしたことであった。当時の新聞が東京商法会議所の会頭である渋沢のグラント接待における活躍ぶりを繰り返し報道したことによって、設立早々であった東京商法会議所は、一早く社会的にも広く知られる存在となり、その後の会員拡大にもつながった。7 月 8 日の工部大学校舞踊会における渋沢の歴史的登場、及び『東京日日新聞』と『郵便報知新聞』のグラント接待の是非をめぐる激しい論争を通して、渋沢の名もまた社会的に知れわたるようになった。1879 年のグラント接待以降、渋沢は当時の大衆向けの出版メディアであった「百人一首」に多数登場している。1879 年の『明治英名百詠選』、1880 年の『現今英名百首』、1881 年の『明治英名百人首』、1882 年の『愛国民権演説家百詠選』のいずれにも渋沢の肖像と総ルビの詩歌、略伝を掲載されていた⁸⁵⁾。略伝には信憑性を問う部分もあるが、一農民から名高い実業家にまで登りつめた渋沢栄一は「当時の人心に大いなる刺激を与へませ世人から讃仰さられたることが深かったので、従ってこうした小伝付き肖像画入りの小冊子が一般から歓迎された⁸⁶⁾」と考えられる。

第二に渋沢の接待は「国民外交の端緒が此処に開けた」⁸⁷⁾もので、また対米国民外交の嚆矢でもあった。政府外交の補完として一民間人である渋沢に「伊藤・井上等の人々もよく注意してくれた」⁸⁸⁾。また、渋沢自身も政府の依頼を受けながらも自分なりに考え、アイデアを出した。政府を後ろ盾に自らを前面に出し、役割分担が違うものの両者の最終目標は同じであった。そして、この最初の体験は後年渋沢が展開した国民外交に大きな影響を与えた。実はこの時期は日本政府が所謂「李鴻章工作」を展開していた時でもあった。早くも 1875 年に天津で領事館を設立した日本政府は、親日派を培うため、直隸総督であり長年対日交渉に君臨していた李鴻章に対し、意図的な「工作」を展開してきた。1878 年 2 月渋沢栄一と益田孝が呼びかけて行った中国北部における飢饉の救済活動もこの「李鴻章工作」の一環であった。1878 年 7 月天津総領事竹添進一郎は大隈重信、伊藤博文へ書簡を出して、この救済活動によって李鴻章の歡心を得ることができ、今後の更なる工作があれば同氏はもっと親日的になると報告した⁸⁹⁾。渋沢はこの救済は「単ニ慈善的ニ出ツルモノ

トシテ見ルモ素ヨリ一大美拳ナリ、況ンヤ東洋攻略的ノ意味ヨリ考フルトキハ、日清両国ノ政治上並貿易上深遠ノ関係アリ」⁹⁰⁾と認識していた。このような「李鴻章工作」の平行線として、1879年に日本は中国との琉球問題交渉などで最大の利益を得るため、国を挙げて接待による「グラント工作」を展開したのである。渋沢は「李鴻章工作」と「グラント工作」のいずれにも深く関わっていたが、それは後の渋沢の日中米三国関係を重視する姿勢と関係があった。

また渋沢がグラント接待にこれほど尽力したのは、米国に対する感情的な要素が入っていたことも見過すことはできない。1867年欧州行の船上で、渋沢は死を恐れず責任を全うしようとしたハリスの話聞き、敬虔な聖公会信徒であるハリスの価値観に共鳴した。「その人に就てその国を思ふ、と云う言葉の通り、西洋人が夷狄である野蛮であるとして居たのは勘違ひであったとの悟りが開けた訳でありまして、その観念からグラント將軍歓迎のことにも、特に一層の力を入れた」⁹¹⁾。ハリスの人格的魅力に圧倒された渋沢は、ハリスへの敬意が米国への好感となり、それはまたグラント接待における精神的モチベーションにもなった。更に格式張らないながらも、大物としての存在感を持っていたグラントの人格が渋沢に好印象を与え、アメリカへの更なる好感と興味へと発展したのである。

おわりに：渋沢栄一の国民外交の原型——その特徴と思想的根源

グラント接待は渋沢にとって初めての国民外交であり、その中で形成された国民外交の原型には渋沢の思想に由来するいくつかの特徴がある。

第一に、グラント接待は単純な親善接待ではなく、日本の国益に直結するものであった。グラント接待への参与は、政府からの動員も事実であるが、根本的には渋沢の国家意識に由来するものであった故に、渋沢はグラント接待に私財を投じることさえも惜しまなかった。渋沢の国家意識は青年時代に形成された。江戸時代末期からアヘン戦争における清国の敗北や外国船の日本近海における出沒などを目の当たりにしたことによって、エリートたちの間では「列強から日本の植民地化を防ぐ」という対外危機意識が共有されていた。それをもっとも強く主張したのが国体思想を繰り返し議論した水戸学であり、青年時代の渋沢も水戸学の大家、藤田東湖の著作を読んで深い感銘を受けている。「渋沢が若い頃学んだ水戸学では、君に忠義を誓う臣は民を安んずる義務を負い、そのために富利を求めるときも時には必要になる」⁹²⁾。大蔵省在官時代の1871年、渋沢は彼自身で発表した『立会略則』の中で、「実業家はその経営にあたって国家意識をもつべきだ」と主張している。国の存立と向上のために国臣と自認する渋沢が、その思想の延長線上に「政府の外交活動の補完として対外活動を行う義務がある」と認識するのも自然であろう。そしてそれらはいず

れも渋沢が少年時代から勉強してきた儒学の社会論の範疇と軌を一にするものであった。1879年から晩年までの間に、渋沢が対朝鮮半島、対中、対米関係において展開してきた国民外交の事例としては、京仁鉄道、京釜鉄道建設のための韓国王室や高官との付き合い、1909年からの米国排日運動への対応、1914年の政府の意向を受けながらの訪中、1919年以降の中国排日運動への対応などである。これらはいずれも国益と直結する案件であり、実を言えば実業家の渋沢にとっては経済の範囲を超えたものも多かったが、渋沢が1921年に「君臣の観念を重んずるのは日本の最も良いところである」と述べたことから分かるように、彼は「国の臣」としての立場を終生貫いたのである。

第二に、グラント接待から、渋沢の国民外交の行動方式が形成されたと言えよう。それは端的に言えば、組織化と協調性の重視、及び政府とのパイプを生かすことであった。グラント接待において、渋沢は福地と共に接待委員会を組織して経済界を動員しながら、周りの意見にもよく耳を傾け、力を合わせて組織的に行動し、この一大事業を成し遂げた。早くも1871年渋沢は『立会略則』の中で「商業を為すには偏頗の取計ひなく自身一個の私論を固執せず、心を合せ力を一にし相互に融通すへし……故に商業をなすには切に会同一和を貴ふ」⁹³⁾と主張した。1867年の欧州外遊で欧州社会に「官尊民卑」がないことに驚愕した渋沢は、1873年民間人となった時点から商人の社会的地位の向上を目指し、そのために商人の団結力と組織化を重視した。渋沢は政府外交を補完する国民外交とは、正に商人が国家への貢献を通して、その社会的地位を高めるよいチャンスでもあるという考えで、それ故に国民外交における商人の組織化と協調性を重視したのであろう。その後の国民外交の中、渋沢は朝鮮協会、日華実業協会、日米関係委員会などのトップとして組織的に対各国国民外交を展開した。グラント接待において、渋沢は大蔵省仕官時代から懇意にあった井上馨などと常に意見交換し、政府の意向を窺いながら自身と経済界の意見を反映した。渋沢は晩年までずっと政府上層部と良好な関係を保っており、財界と政界とのパイプ役として大きな役割を果たした。渋沢の展開した一連の国民外交は情報獲得、財界や個人の意見の反映、政府への圧力にもなりうる存在として、政府とのパイプを十分生かしてきた。

第三に、グラント接待において、渋沢は政府の言いなりになることなく、相当の主体性をもって本件に当たった。コレラの流行によって政府上層部が天皇臨幸を否決した際、渋沢は岩倉右大臣に書簡を出してその必要性を力説し、政府関係者に力強く働きかけるなどして、最終的に天皇臨幸を実現させた。渋沢の学んだ水戸学では臣は君に忠義を誓うが、その行為は遂一君の命令にはよらず、その言動において主体性を保つ義務があるとされる。忠臣としての自己意識は、1873年、井上馨と共に辞官した際、連名で出した「財政改革ニ関スル奏議」に至っても尚貫かれており、国のために思えばこそ、政府の間違っているやり方に反対するという自主性を体現することが強調されている⁹⁴⁾。国の臣だと自認する渋

沢からすれば、政府に対して「諫言」を行うべきであり、政府の間違いを指摘することが道義的に義務づけられているのである⁹⁵⁾。

それ以降の渋沢の国民外交は、無論政府に協力し、政府の意向を受ける一面も否認できないが、それは渋沢と政府の考えている国益が基本的に一致しているからである。しかし、渋沢が彼自身の考え方で行動し、時には政府を批判したり、政府の物事の進め方に圧力を加えたことは、決して見過すことはできない。1920年代を通して渋沢は日本政府の対中政策を厳しく批判し、様々な方法を使って自身の日中関係の考え方で政府に影響を与えようとした。渋沢の政府批判は、時期によって程度の差があるものの、青年時代から晩年まで続いたものである。それは根本的に言えば上述の臣としての主体性に由来するものであった。しかし、この主体性は、「君に忠義を誓う」ことが前提となっていたため、最初から不完全な性格をもっていた。日清戦争など侵略戦争が発動された際、本意か不本意かは別として協力的な姿勢をとったのも、このような不完全な主体性に由来するものであった。それは渋沢の限界であり、時代の限界でもあった。

1930年、渋沢の尽力によって上野公園にグラント植樹記念碑が建てられた。この頃の渋沢は長年の対米国民外交の実績によって、アメリカでも「Grand old man」として親しまれていた。渋沢はその翌年の1931年11月亡くなっている。渋沢は生涯に渡って世界の多くの友人を飛鳥山邸に招待したが、国別の統計ではアメリカ人が圧倒的に多く、130人を超えていた⁹⁶⁾。以上述べてきたように、グラントはその渋沢が飛鳥山邸に招待した最初のアメリカの賓客であり、彼の対米国民外交のスタートラインなのである。

注

- 1) 酒井一臣「渋沢栄一の「国民外交」渡米実業談を中心に」、『渋沢研究』第26号、2014年1月、15頁。
- 2) 信夫淳平『外政監督と外交機関』日本評論社、1926年、51頁。
- 3) 現代の民間外交という用語について、例えば広辞苑によれば「芸術・文化・スポーツなどを通じて民間人によって行われる親善外交」とされる。
- 4) 信夫淳平『外政監督と外交機関』日本評論社、1926年、53-54頁。
- 5) 木村昌人『渋沢栄一—民間経済外交の創始者』、中央公論社、1991年、iv-v頁。
- 6) 片桐庸夫『民間交流のパイオニア 渋沢栄一の国民外交』、藤原書店、2013年、41頁。
- 7) 入江昭『米中関係のイメージ』、平凡社、2002年、35頁。
- 8) 渋沢栄一「講話」、『日米関係委員会協議会報告書』、1920年、35頁。
- 9) 慶応3年8月2日（1867年）渋沢栄一から尾高淳衷宛ての書簡、『渋沢栄一伝記資料』別巻第三 書簡（一）、313頁。
- 10) 石井寛治『日本の産業革命』、朝日新聞社、1997年、14頁。
- 11) 松浦正孝『財界の政治経済史』、東京大学出版会、2002年、53頁。
- 12) 渋沢栄一「第一国銀行開業祝辞」、『渋沢栄一伝記資料』第4巻、48頁。
- 13) 「佐々木勇之助氏座談会筆記」、『渋沢栄一伝記資料』第4巻、27頁。

- 14) 渋沢栄一「第一国立銀行第一三回株主総会における演説」、『渋沢栄一伝記資料』第4巻, 397頁.
- 15) 大阪紡績会社は1882年に設立し, 1883年から操業し始め, 日本初の本当の意味における株式会社である.
- 16) 有賀夏紀『アメリカの20世紀(上)』, 中央公論新社, 2012年, 24頁.
- 17) 有賀夏紀『アメリカの20世紀(上)』, 中央公論新社, 2012年, 28頁.
- 18) 『渋沢栄一伝記資料』第3巻, 746頁.
- 19) 渋沢栄一『雨夜譚』(長幸男校注), 岩波書店, 1984年, 119頁.
- 20) 坂本慎一『渋沢栄一の経世済民思想』, 日本経済評論社, 2002年, 233頁.
- 21) 渋沢栄一「商業会議所に就て」, 1916年, 『竜門雑誌』第451号所収.
- 22) 1768年設立のアメリカのニューヨークと1783年設立のイギリスのグラスゴーの商業会議所と比べると, 日本の商法会議所の開設が著しく遅れていた. 商業会議所の設立の性格において当時フランスに代表される国王特許の議院制立法組織とイギリス・アメリカにみられる会員制任意組織の二分類があり, 渋沢は東京商法会議所の設立でモデルとして選んだのはイギリス・アメリカ型の会議所であった.
- 23) 1841年生まれの福地は漢学や英語を学び, 岩倉使節団にも同行した. その後は渋沢の紹介で伊藤博文と意気投合して大蔵省に入りまた伊藤と共にアメリカへ渡航し, 会計法などを調査して帰国し, 1874年に大蔵省辞任し『東京日日新聞』に入社. 主筆・社長として「漸進主義」を唱え, 政府系の『東京日日新聞』の理論的支柱として活動していき, 明治ジャーナリストとして大いに名をあげた. 福地の存在感は記者として従軍し天皇に拝謁して戦況を報告する名誉に浴した西南戦争を契機にその頂点を迎えた. またその活動は言論分野に留まることなく多岐に渡り, 実業界での活動(東京商法会議所), 東京府会での政治活動も注目された.
- 24) 東京商工会残務整理委員会編「東京商工会沿革始末」, 1892年, 17頁.
- 25) 浅田毅衛「東京商法会議所の設立と明治前期の流通政策」, 『明大商学論叢』第80巻, 1998年, 第1・2号, 46頁.
- 26) 簗原俊洋・五百旗頭真「日米の遭遇と世界史への登場 19世紀後半」, 五百旗頭真編『日米関係史』, 有斐閣, 2015年, 18頁.
- 27) この時期のアメリカの対日貿易は輸出より生糸と茶の輸入に重きを置いたため, 日本の輸入関税の引き上げへの抵抗感が弱かった.
- 28) 簗原俊洋・五百旗頭真「日米の遭遇と世界史への登場 19世紀後半」, 五百旗頭真編『日米関係史』, 有斐閣, 2015年, 19頁.
- 29) 大日本文明協会編『日米交渉五十年史』, 1909年, 208頁.
- 30) 宮永孝「解説」, 『グラント将軍日本訪問記』, 雄松堂書店, 1983年, 194頁. この本における日本滞在中のグラントの動向に関する内容を翻訳した『グラント将軍日本訪問記』には, 来日中のグラントの動向を整理した宮永孝の解説が収載されている.
- 31) ガラシーノ, ファクンド「明治前期の他者認識を巡って: U.S. グラント一行訪問に錯綜する眼差しから」, 『日本学報』2014年3月, 205頁.
- 32) 1879年1月17日寺島外務卿より三條太政大臣宛「米利堅合衆国前大統領『グラント』氏来航ニ付御接遇の儀伺の件」, 『日本外交文書』第12巻, 128頁.
- 33) 1879年1月20日寺島外務卿より三條太政大臣宛「獨逸国伊太利国皇族米利堅合衆国前大統領来航ニ付接伴掛被仰付度段上申ノ件并ニ太政官発令」, 『日本外交文書』第12巻, 129頁.
- 34) 1879年1月24日寺島外務卿より三條太政大臣宛「国賓接待費ノ義伺ノ件」, 『日本外交文書』第12巻, 129-131頁.
- 35) 1879年2月8日寺島外務卿より三條太政大臣宛「米利堅合衆国前大統領『グラント』氏接待費不足ノ

- 儀上申ノ件」、『日本外交文書』第12巻、132-134頁。
- 36) 1879年7月4日『東京日日新聞』。
- 37) 大日本文明協会編『日米交渉五十年史』、1909年、209頁。
- 38) ガラシーノ、ファクンド「明治前期の他者認識を巡って：U.S. グラント一行訪問に錯綜する眼差しから」、『日本学報』2014年3月、214頁。
- 39) 伊原敏郎編『明治演劇史』、1933年、『渋沢栄一伝記資料』第25巻、500頁。
- 40) 1879年7月13日『朝野新聞』。
- 41) 『日本外交文書』第12巻、29頁。
- 42) 大日本文明協会編『日米交渉五十年史』、1909年、207頁。
- 43) 『日本外交文書』第12巻、177-179頁。
- 44) トリート著・村川堅固訳補『1853-1921年日米外交史』、右文館、1940年、133頁。
- 45) 明治天皇著〔他〕『グラント将軍との御対話筆記』、国民精神文化研究所、1937年、8-9頁。
- 46) 安岡昭男『明治前期日清交渉史研究』、巖南堂書店、1995年、14頁。
- 47) 渋沢栄一「グラント将軍の歓迎会を回想して」、1928年3月、『竜門雑誌』第474号、『渋沢栄一伝記資料』第25巻、525頁。
- 48) 安岡昭男「明治前半期における井上馨の東亜外交政略」、『法政史学』第17号。
- 49) 『渋沢栄一伝記資料』第17巻、173頁。
- 50) 穂積歌子「グラント将軍歓迎の思ひ出」、1931年2月、『竜門雑誌』第509号、『渋沢栄一伝記資料』第25巻、533頁。
- 51) 「上野公園 御臨幸の記」、『東京日日新聞』1879年8月26日。
- 52) 「雑報」、1879年6月29日『朝野新聞』。
- 53) 渋沢栄一「グラント将軍の歓迎会を回想して」、1928年3月、『竜門雑誌』第474号、『渋沢栄一伝記資料』第25巻、525頁。
- 54) 渋沢栄一「グラント将軍の歓迎会を回想して」、1928年3月、『竜門雑誌』第474号、『渋沢栄一伝記資料』第25巻、526頁。
- 55) 伊原敏郎編『明治演劇史』、1933年、『渋沢栄一伝記資料』第25巻、500頁。
- 56) 「雨夜譚会談話筆記」（下）1927年11月-1930年7月、『渋沢栄一伝記資料』第25巻、508頁。
- 57) 1879年7月4日『東京日日新聞』。
- 58) 穂積歌子「グラント将軍歓迎の思ひ出」、1931年2月、『竜門雑誌』第509号、『渋沢栄一伝記資料』第25巻、496頁。
- 59) 1879年7月18日『東京日日新聞』。
- 60) 穂積歌子「グラント将軍歓迎の思ひ出」、1931年2月、『竜門雑誌』第509号、『渋沢栄一伝記資料』第25巻、504頁。
- 61) 1879年8月5日芝崎確次郎日記、『渋沢栄一伝記資料』第25巻、502頁。
- 62) 『渋沢栄一伝記資料』第25巻、508頁。
- 63) 五百旗頭薫「福地源一郎研究序説—東京日日新聞の社説より」、坂本一登・五百旗頭薫編『日本政治史の新地平』、吉田書店、2013年、56頁。
- 64) 杉山弘「コレラ騒動論：その構造と論理」、新井勝敏編『日本の時代史 22 自由民権と近代社会』吉川弘文館、2004年、149頁。奥武則『文明開化と民衆 近代日本精神史断章』新評論、1993年、88頁。
- 65) 1868年以降の10年間に国家体制の確立を目指し、あらゆる面における変革が試みられる中、強制力を発揮するまで政策を遂行しようとする役人と生活習慣と慣行に安住したい人々との間に様々な衝突が絶え間なく起こった。

- 66) 新井勝紘編『日本の時代史 22 自由民権と近代社会』吉川弘文館, 2004 年, 152-153 頁.
- 67) 1879 年 7 月 25 日『郵便報知新聞』, 『渋沢栄一伝記資料』第 25 卷, 512 頁.
- 68) 1879 年 8 月 1 日渋沢栄一・福地源一郎から岩倉具視宛の書簡, 『渋沢栄一伝記資料』第 25 卷, 509 頁.
- 69) 1879 年 8 月 4 日『東京日日新聞』, 『渋沢栄一伝記資料』第 25 卷, 515 頁.
- 70) 「雨夜譚会談話筆記」(下) 1927 年 11 月-1930 年 7 月, 『渋沢栄一伝記資料』第 25 卷, 507 頁.
- 71) 穂積歌子「グラント將軍歓迎の思ひ出」, 1931 年 2 月, 『竜門雑誌』第 509 号, 『渋沢栄一伝記資料』第 25 卷, 531 頁.
- 72) 穂積歌子「グラント將軍歓迎の思ひ出」, 1931 年 2 月, 『竜門雑誌』第 509 号, 『渋沢栄一伝記資料』第 25 卷, 493 頁.
- 73) 「工部大学校の夜会」, 『東京日日新聞』1879 年 7 月 10 日.
- 74) ガラシーノ, ファクンド「明治前期の他者認識を巡って: U.S. グラント一行訪問に錯綜する眼差しから」, 『日本学報』2014 年 3 月, 207 頁.
- 75) 1879 年 7 月 16 日グラントから Daniel Ammen への書簡, ガラシーノ, ファクンド「明治前期の他者認識を巡って: U.S. グラント一行訪問に錯綜する眼差しから」, 『日本学報』2014 年 3 月, 208 頁.
- 76) ガラシーノ, ファクンド「明治前期の他者認識を巡って: U.S. グラント一行訪問に錯綜する眼差しから」, 『日本学報』2014 年 3 月, 207 頁.
- 77) ガラシーノ, ファクンド「明治前期の他者認識を巡って: U.S. グラント一行訪問に錯綜する眼差しから」, 『日本学報』2014 年 3 月, 210-211 頁.
- 78) 1879 年 8 月 12 日伊藤博文内務卿から清国駐劄割割戸公使宛ての書簡, 『日本外交文書』第 12 卷, 185 頁.
- 79) 1879 年 8 月 12 日伊藤博文内務卿から清国駐劄割割戸公使宛ての書簡, 『日本外交文書』第 12 卷, 185 頁.
- 80) 謝必震「歴史の心結: 琉球問題と中日関係」を参考. 謝必震氏のこの論文は 2015 年 8 月の国際シンポジウム「世界史から見る 21 世紀東亜の発展と協力・抗日戦争史(独立運動史)研究の成果と課題」の論文集に収録されている.
- 81) 同氏は日本文化史におけるグラントの果たした役割について考察した. 倉田喜弘『芝居小屋と寄席の近代—「遊芸」から「文化」へ—』, 岩波書店, 2006 年.
- 82) 中嶋哲也「術から文化へ: 元米国大統領グラントの演武鑑賞と柔術」, 『鹿児島大学教育学部研究紀要. 人文・社会科学編』, 2015 年 3 月 11 日.
- 83) 穂積歌子「グラント將軍歓迎の思ひ出」, 1931 年 2 月, 『竜門雑誌』第 509 号, 『渋沢栄一伝記資料』第 25 卷, 506 頁.
- 84) 中嶋哲也「術から文化へ: 元米国大統領グラントの演武鑑賞と柔術」, 『鹿児島大学教育学部研究紀要. 人文・社会科学編』, 2015 年 3 月 11 日.
- 85) 菊池哲彦「渋沢栄一, 流通する肖像」, 平井雄一郎・高田知和編『記憶と記録のなかの渋沢栄一』, 法制大学出版局, 2014 年, 155 頁.
- 86) 穂積重遠「百人一首中の青淵先生」, 『竜門雑誌』第 436 号, 『渋沢栄一伝記資料』別巻第三, 263 頁.
- 87) 渋沢栄一「グラント將軍の歓迎会を回想して」, 1928 年 3 月, 『竜門雑誌』第 474 号, 5 頁.
- 88) 渋沢栄一「グラント將軍の歓迎会を回想して」, 1928 年 3 月, 『竜門雑誌』第 474 号, 5 頁.
- 89) 1878 年 7 月 13 日竹添進一郎天津総領事から伊藤博文, 大隈重信への書簡, 『伊藤博文関係文書』6, 塙書房刊行, 145-146 頁.

- 90) 竜門社『青淵先生六十年史』, 1900年, 417頁.
- 91) 渋沢栄一「グラント將軍歓迎の追憶」『竜門雑誌』第509号, 1931年2月, 『渋沢栄一伝記資料』第25巻, 530頁.
- 92) 坂本慎一『渋沢栄一の経世済民思想』, 日本経済評論社, 2002年, 63頁.
- 93) 渋沢栄一『立会略則』, 『経済篇』明治文化全集第10巻, 復刻版, 日本評論社, 1992年, 114頁.
- 94) 渋沢栄一・井上馨「財政改革ニ関スル奏議」, 『渋沢栄一伝記資料』第3巻, 744-748頁.
- 95) 坂本慎一『渋沢栄一の経世済民思想』, 日本経済評論社, 2002年, 68頁.
- 96) 『渋沢栄一伝記資料』の中の外賓接待と国際親善の内容によって, 渋沢が飛鳥山邸で招待した外国人を国別に統計した結果として, 一番多いのはアメリカ人の135人である.